

探究学習が目指す方向性

荒木 寿友(本学教職研究科教授 教育方法学 道德教育)

2018年に告示された高等学校の学習指導要領では「総合的な探究の時間」をはじめ、「古典探究」や「日本史探究」など、「探究」という言葉がやたらと目につくようになりました。これだけではなく、小中学校の「総合的な学習の時間」の『解説』においても、探究活動を充実させていくことが従前よりも強調されています。このように「探究」は近年脚光を浴びていますが、探究は何を目指してなされる教育活動なのでしょう？ そもそも考えてみましょう。

「探究」(inquiry)という概念を体系的にまとめたのは、アメリカの哲学者デューイ(J.Dewey)です。彼は1938年に出版された『論理学:探究の理論』という書物の中で、探究について定義しています。彼によれば、探究とは「不確定な状況を、確定した状況に、すなわちもとの状況の諸要素をひとつの統一された全体に変えてしまうほど、状況を構成している区別や関係が確定した状況に、コントロールされ方向づけられた仕方で転化させることである」と述べています。大切なポイントは、不確定な状況が確定した状況になるということです。不確定な状況とは、もやもやとすること、すっきりとしないこと、わからないこと、なぜ？ どうして？ と疑問に感じることです。そういった不確定な状況、あるいは不安定な状況が、あれやこれやと試行錯誤をしながら問題解決をしていく中で、「なるほど!そういうことか」という安定した思考状態になることが探究なのです。そして確定した状況で得られるもの、それが「知識」や「信念」であると言われていました。

探究活動をするに当たって忘れてはならないのは、探究が何を目的として知識や考え方を得ていくのかという点です。探究の過程を経ることで確実な「知識」を身につけること、あるいは「批判的思考力」などを育てていくこと、これらも探究学習の目的であると言えるでしょう。しかし、それらとともに、探究学習を通じて、「人間としての在り方や生き方を考える」ということも

外してはならないポイントだと思っています。

最近、某タレントさんが、ホームレスの存在価値を否定する優生思想発言で「炎上」する騒ぎがありましたが、彼は知的にはかなりの高い能力を有している方だと思っています。その能力をかなり偏った個人主義的な使い方をしてしまったのではないのでしょうか。

実は、この問題はこのタレントさんだけに当てはまる問題ではなく、日本の教育そのものが有する脆弱性を表しているのではないかと思っています。現在、ICTを用いた「個別最適な学び」を推奨していく改革が進められていますが、これはややもすれば私人的で個人主義的な学びを助長しかねず、結果的に他者のことを顧みない人を育て上げ、それがますます社会の分断を促進してしまうことにつながっていくかもしれません。

探究学習が目指すのは、ホリスティックな(全人的な)、総合的な人格形成であって、「知識」や「思考力」をどの方向に使うのかということも含めて学んでいくことだと考えています。その方向性とは、学習指導要領前文において記してある、あらゆる他者を価値ある存在と認め、豊かな人生を切り開き、持続可能な社会の創り手となっていくことに他なりません。

学校での探究学習が、独りよがりの知識や思考力の獲得ではなく、人間としての在り方や生き方を考え、他者を大切に、子どもの生活そのものを豊かにしていくことと強力に結びついていく必要があると思っています。そして、獲得した「総合的な能力」を持続可能な社会の実現に用いてほしいと思います。

他者とよりよい関係を築いていきながら、社会をより良いものにしていくという大きな目的に辿り着くために自分のありとあらゆる「能力」を伸ばしていく、そこを目指すのが「教育」であるならば、学校教育で展開される「学び」は、そもそも探究的であるはずで、社会の分断を防ぐための学校教育、探究学習でなければなりませんね。